

この度はお試し版をDLしていただき
真に有難うございます。
製品版から一編「あの男の娘は今！？」を
収録致しました。是非ともご参考にして下さ
い。

2015年
タケチャン大佐

あの男の娘は今！？

（初出
..
2011年1月9日）

今から数年前、とある「美少女」が一部のマニアの間で話題になっていた。

「彼女」のHNは『龍ヶ崎かれん（りゅうがさき・かれん）』と言つた。いや、「彼女」と言うのは少し変かも知れない。

実はかれんちゃんは所謂「男の娘（おとこ）のこ」と呼ばれる、女装つ子だったのだ。

当時は渡●瀬準だの藤●なで●こだの宮●路瑞●だの、男の娘と言うジャンルが異様に持て囃されて一種のブームになつていた。今から

考えれば頭のおかしな現象だったが、かく言

う俺もそんなブームに夢中になつていた一人で、

先述のかれんちゃんに心を奪われていた口だ。
男の子の筈なのに、顔も声も仕草もまるつきり女の子っぽくて可愛らしく、いや、現実の女の子より当時よっぽど可愛かつたと断言できる。

彼女……いや彼の撮影会やオフ会は常に大盛況で、コスプレ写真集は即日完売するし動画は常に在り得ない閲覧数を記録していた。そんな彼が数年前、突然引退を宣言した。

人気絶頂の中で引退したから大騒ぎしたものだ。年齢的に、女装がきつくなつたと言う説が今では有力視されている。

ネットの世界の流行り廃りは現実よりも早いもので、あれだけ熱中していた彼の話題も今では全く耳にしない。だけども俺は彼の事が忘れられず、今でもスマホの待ち受け画像をかれんちゃんの画像にしている。

*

今現在俺は医薬品、と言うか漢方薬のメーカーに勤めている。去年入社したばかりの頃は右も左も解らない小僧だったけれど、頼れる先輩、永源真（えいげん・まこと）さんに手取り足取り教えてもらつて何とか戦力になる

くらいには成長したと思つてゐる。

「はい、畏まりました、はい、失礼します……」

同僚がゲラゲラ笑いながら定食にバクつく。

「じゃ、俺先に行つてるから」

「ああ」

永源さんはしつかり者で仕事も出来る凄い人だ。まだ若いのに俺を含めて部下を何人も抱えている。おまけに顔つきが中性的で整っているから女子にも人気がある。まるでチートみたいな人だ。

つと、俺も飯を食い終わつたし、食器を返してオフィスへ戻ろう。

昼飯時、俺は社食で飯を食う。漢方薬の会社だけあって特別メニューには漢方が使用された料理が並んだりもする。お茶は新製品のサンプルだ。

「さーてど……あれ、ケータイどこやつたんだ

気がつくと、ポケットにしまつていたとばかり思っていたケータイが入っていない。慌てて社食に戻ろうとすると、目の前に永源先輩がいた。

「このスマートフォン、赤坂君のかい？」
「あ、はいすいません先輩」

「いや、気にしなくてもいいよ。それより、この待ち受けの娘は……」

「えつ」

どうもかれんちゃんの待受けをロツク画面越しに見られていたようだ。

「い、いやこれは、その……」

「龍ヶ崎かれん……でしょ？」

「え、先輩、知ってるんですか？」

「まあね、僕も昔は気になつててね」

驚いた。まさか先輩みたいな人が知っていたなんて。

「どうだい赤坂君、今日は一緒に飲みに行かないか。今日は奢るよ」「本当つすか、それじやあゼビ……」

*

誘われたのは夜の秋葉原だった。てっきり新橋かどこかかと思つただけに少し驚いた。何で

も、先輩は秋葉原のマンションで暮らしているのだとか。

某同人誌ショップの裏側にある古ぼけた狭い焼鳥屋で、俺達は一緒に飲む事にした。

「それで、丁度俺がネットやり始めた頃にその娘がいたんですよ」

「へえ……」

「いやあ可愛かつたよなあ、特に魔女っ娘のコスプレとか、あと写真集も買いましたよ。丁度そこの同人ショップで

「そうか……」

「でもどうして先輩知つてんすか？ネットじや有名だったかも知れないけれど、まず一般の人は知らなさそらだし」

「まあ色々あつてね……」

俺は砂肝を摘みながら焼酎のお湯割りを煽る。

「つと、お客さん達盛り上がりがつてゐるねえ」

店主が俺たちの話に割つてはいる。

「まあね、でもおじさん知らないでしょ、龍ヶ崎かれんなんて言つても……」

「いやいや、この店の常連だつたよ。いつも男何人も連れてうちの店に来てたさ」

「まだウソだと思うなら僕の家に来なよ。本当に顔のパーツとか色々と面影はあるが、そ
う簡単には信じられない。

「ここまで他愛の無い話だつた。しかし店主の
次の発言に一気に酔いが醒める事となる。

「と言うよりも、目の前にいるじゃない。すつ
かり大人になつたけれど、龍ヶ崎ちゃんてえの
が」

*

……持つてた串を一瞬落としそうになる。しかも店主は、よりによつて永源先輩を指差してそう言つたのだ。

焼鳥屋からすぐ近くにある、秋葉原の高層
マンションに案内された俺。
マンションの中はとても綺麗でよく整理されていて、先輩の寝室からは、秋葉原の夜景が一
望できる。

「すごい所住んでますね」

「それほどでもないよ。秋葉原に住みたくて、探したらこくらいしか無かつたんだ」「へえ……」

たしかにネットの世界で名を馳せたかれんちゃんなら、アキバに住みたいと思うのも当然かも知れない。けれど……。

「これが証拠だ」

先輩がクローゼットを開けると、そこには、かつて龍ヶ崎かれんちゃんが着用していた衣装の数々が、今でも大切に保管されていた。

先輩の言葉が、胸に突き刺さる。

「この衣装は確か福岡に遠征に行つたときのかな。それからそうだ、タイのイベントに招待された時にこれを着てたんだつけ」

「……本当に、先輩があの龍ヶ崎かれんちゃんだったんですね……」

俺は脚が震えた。かつて画面越しに憧れ、そして……その、夜のメインディッシュにして何枚ものティッシュを消費したあの龍ヶ崎かれんちゃんが、今日の前にいる。

「…………」れも、もう着られないんだよね……本当はもっとずっと、長く着ていたかつたんだけれども

「……」

「元々僕は身体の成長が遅いらしくてね、18くらいまでは女装も余裕だつたよ。だけれども段々体つきが男らしくなつてきて、喉仏もこへきて急に発達して女の子の声が出しづらくなつて、人生で一番の絶望を味わつたよ」

「やつぱり……」

俺を含め、皆が想像していた理由にほぼ当たっていた。

「ん？」
「ちよつと、いいですか？その、失礼かも、しないでけれど……」

「それでね、今まで応援してくれた人たちに、こんな醜態晒したら失礼だと思つて引退したんだ。それからは今までの事全部忘れて勉強に集中して、いい大学に入学してこうやって大きな会社にも就職できたり給料も貰える様になつた……」

元々が在り得ない状況だからか、俺はさらには在り得ない発言をしてしまう。

「……その、この中から一着、着て貰つてもいいですか？む、無理は承知なんです！でも、でも折角本人がいるのに、このまま帰りたくないんです！」

なんだか、先輩のプロ意識と言うものをひしひしと感じる。ファンを裏切りたくなかつたらから、それまでの自分を全て捨てるなんて、俺には到底出来ないし想像を絶するような苦痛を味わつたに違ひない。

「……言つてしまつた。俺は脚が震えて動けない。

「……本当にいいの？こんな、もう大人の男になつちやつたのに」

「いいんです！一度でいいから、かれんちゃんをナマで見たかつたんですつ！」

「……そこまで言うなら……」

「……所で、何か飲むかい？冷蔵庫でワインを冷しておいたんだけれど」

「……あの、先輩」

俺は背筋を伸ばし、再び寝室に入る。

先輩は何かを決意したらしい。

「……ちよつと、外してもらつていいかな？ワインでも飲んで待つて、着替えるから」

「！！！！！」

俺は拳をぎゅ、と握り締める。

「はい、いくらでも待ちますっ！」

「これで、いいかな……久々に着たから、似合わないかも知れないけれど……」

そこには、かつて俺が憧れていた『龍ヶ崎かれん』ちゃんが間違いなく立っていた。

確かに、体つきも顔つきも男らしくはなったけれども、だけど、俺には間違いなく、あの頃のかれんちゃんに見える。

*

多分高いワインなんだろうけれど、味が全然解らない。

先輩が今、あのかれんちゃんに着替えてるなんて想像したら心臓がバクバクして止まらない。

「でも、なんだか恥かしいな……身体が大きくなつたから、丈が合わないし袖も短いし……ウイッグだつて、久々に被つたからずれてるかもしれない……」

「……かれんちゃんっ！」
「うわっ！」

俺は失礼にも、女装した先輩に抱きつき、ベッドに押し倒してしまった。

「いいよ」
「つ、は、はい！」

「ああ、かれんちゃん、かれんちゃんがああ
「ちよ、待ちたまえ！赤坂君つつ！」

ワインの酔いが回りすぎていた俺は、とうとう暴走してしまう。

「ああ、かれんちゃん、かれんちゃん可愛いよ、
いい匂い、いい匂いする、かれんちゃんああああ
んつ」

「ちよ、待つて、駄目だつてばつ！」

焦る先輩の腕を掴みながら、俺はスカートを捲つて股間を晒す。

「お、女物、かれんちゃんてばやる気満々じや
ん、やつぱり俺達のかれんちゃんは健在だ
よつ」

「あ、駄目、許してつ」

先輩が穿いている縞模様のパンツを脱がし、
フアスナーを降ろしどうとう先輩の穴に捻じ
込もうとする。

「あー、かれんちゃん、夢にまで見たかれん
ちゃんのアヌス……」

(ぬふふふふ)

「あああああんつ」

先輩の穴は大分使い込まれてたらしく、俺が
象徴を捻じ込んでもすんなりと受け入れてし
まつた。

「や、あ、ひ、久しぶり、●年ぶりだから、あ
ぎいつ」

「はー、はー、かれんちゃん、かれんちゃんのア
ヌス、すつごい締めるよ、チンチンもこんなにビ
ンビンで、可愛いのにやらしー男の娘だああ」

俺は先輩の象徴を握り締めて上下に扱く。

*

「ひ、ひぐ、あん、駄目、赤坂君、ら
めええええつ」

「かれんちゃん、もう、俺、出る、出すよ、出
すよかれんちゃんの尻穴に、たつ。ふりザーメン
出してあげるからねつ」

「あ、ひや、んぐぐぐつ！？」

（びゅる、どびゅるる、どびゅぎゅるる、びゅ
ぎゅる、どつぶんどびゅる、びゅるる、びゅく、
びゅー！びゅー！）

（ばびゅつ、どつぴゅ、びゅる、びゅー！
びゅー！）

「あ、は、はー……はー……」

はあ、はああ……俺の身体で、いとしのかれん
ちゃんが……。

「すんませんでしたあああああああああああ
あああああああああああああああああああ
ああああああ」

いざ賢者タイムに突入したら超絶望的な光
景がそこに広がっていた。

今日の前で女装したまま汚された先輩の姿
を見て俺は人生終了のカウントダウンが始ま
たような気がした。

「……赤坂君
「ひやいいい」

思わず声が上ずる。てつきり怒られるものだ
とばかり思い必死に土下座して頭をフローリ
ングに擦り付ける。

「……もう少し、優しくしてよ。言つてくれれば、その……させてあげたのに」

「へ？」

「だ、だつて男同士なんて久しぶりで、照れくさくつて……」

「ただいまー」「はーい」

何だか、先輩と言うよりもかれんちゃんそのもののリアクションのような気がする。

玄関に、主婦と思われる女性と子供が入ってきた。

「す、すみません……」

「……着替えて、いいかな？」

「あ、はい喜んで！（※意味不明）」

*

「貴方ーお客さん來てるの？」

「ああ、会社の後輩だよ」

「え」

……先輩、既婚だつたんかい！

先輩が着替える間、俺は頭の中を整理し

ようとした。しかしその整理しようとしている頭の中はまるでゴミ屋敷みたいに氾濫していくところから手をつけていいのか解らない。

でも、もしかしたら俺達このまま、イケナイ

関係になつてしまふかも知れない……で、でも相手が先輩、いや、かれんちゃんだったら……なんて考えてたら、チャイムが鳴った。

「『めん』めん、ついでに言うと、出会いも少々変わつてね」

「そうなのー私、龍ヶ崎かれんちゃんのファンでね、お見合いしたらまさかこの人が、ってなつたの。それでもう一直線にゴールインつて訳」「へえ……」

何だか、肩透かしを食らつた氣がするのは気のせいだろうか。先輩の奥さんの隣には子供さんがいる。

「あーでも確かに先輩に似てますね、このお坊ちゃん」

「いやいや、かれんは女の子だよ」「何!?」

またも驚いた。女装子だった先輩の子供は、ボーアッシュな女の子だったのだ。しかも名前が。

「女の子が生まれたから、『かれん』を継いでも

らおうと思つたんだけれどもね、どうも本人が男の子っぽくて……」

先輩は苦笑いしていた。

(完)

